

筋肉的キリスト教徒とジェントルマン

概念の変容過程の問題とかかわって

山田岳志

Muscular Christianity and Gentleman with reference to the historical process of its conceptual transition

Takeshi YAMADA

The aim of study is an attempt to make clear the development of the concept of "gentleman" in relation to its social structure in nineteenth century. It had been said that so called sportman-ship and fairplay in modern sport was influenced and was formed by the middle classes, and made the remarkable development. Namely, England was first country to industrialize and development of modern sport-formation be seemed to just a reflect of this economic change, however, this answer based on such rude economic determinism is unsatisfactory. And the important thing is change in the gentlemanly behaviour which ocured in that connection. From this point of view, the concept of "gentleman" in nineteenth century will be discussed in this paper, mainly concerning the concept of "gentleman" treated in the works of C. kingsley and T. Hughes.

問題意識と研究の視点 一序にかえて一

フランス人文学者、イポリット・テーヌは『イングランドの覚え書き』で1850—60年代のイギリス・スポーツの状況についてこう語っている。

On the whole, education, on these term is not unlike that of the Spartans: it hardens the body and it tempers the character. But, as far as I can make out, it often produces (merely) sportmen and louts.¹

ところで、イポリット・テーヌがパブリック・スクールの運動競技に対して批判的の反応を示すうちにもこの時期こそはfairplay, amateurism, team-spirit等の総体である近代Sportman-shipがまさにイギリス的人格形成の理念として形成さ

れてくるのである。それは、ジョージ・オーウェル的に言えば資本主義的倫理と貴族的倫理とが写しだすイギリス社会、つまり、ブルジュアの価値体系に合致したS.スマイルズのジェントルマン像を内包するかたちで出現してくるクリスチャン・ジェントルマンとH.ニューマン的ジェントルマンとの融合を教育基調とした教育制度はそのまま近代Sportman-shipの理念形成の過程でもあり、19世紀半ばに認められた運動競技への崇拜もこうしたイギリス社会の変動とは無縁ではなかったと思われる。そして、E.C.Mackが指摘するような時代的背景、つまり、

Again, the passion for game, checked somewhat in the sixties, blossomed more fully under the influence of the increased competitive spirit of the age, encourage-

ment by the new plutocracy, and the more widespread interest in imperialism, until it assumed proportions undreamed of in the sixties.²

このような時代条件こそは近代Sportman-shipの理念が問い直されてくる時代を物語るものであったろう。さて、『Athleticism』の発展、展開や、さらにはSimonnが「アーノルド流の主張は運動競技の重視や、C.キングズリーモーリス流の『男らしさ』の理想に席をあげわたしつつあった」³と指摘するように近代Sportman-shipの思想的構築がT.アーノルドの影響を受け継いだと思われるC.キングズリーやT.ヒューズが提唱した筋肉のキリスト教徒の行動原理のもとに問い直されてくるのである。1857年に出版されたT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』の爆発的売れ行きはそのまま近代Sportman-shipの理念形成を物語るものであったろう。また、H.スペンサーは1858年『Physical Education』においてC.キングズリー等の筋肉のキリスト教徒による体育活動について次のような評価を与えている。

Happily the matter is beginning to attract attention. The writings of Mr Kingsley indicate a reaction against over-culture ; carried perhaps, as reaction usually are, somewhat too far. Occasional letters and leaders in the newspapers have shown an awakening interest in physical training. And the formation of a school, significantly nicknamed that of "muscular Christianity," implies a growing opinion that our present method of bringing up children do not sufficiently regard the welfare of the body.⁴

さて、C.キングズリーの『Two years Ago』やT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』によって表明された思想的傾向を意味するものとしてその後T.C.サンダーズ等によって戯言的に使用された筋肉のキリスト教徒の思想はパブリック・スクールを舞台に新たなクリスチャン・ジェントルマン像のモデルを創り出していくようになる。特にT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』はその思想的背景をC.キングズリーに求められ

るにしても、スポーツを人格陶冶の手段として活用していったのは彼の作品においてであったと言われている。さて、ルイ・カザミアンは文学作品は時代的世論の結果であり、また文学作品は事実としての価値、又兆候を示すものとしての価値を持つと指摘している。⁵だとすれば、中産階級におけるスポーツの社会哲学を定式化した人と⁶いわれるT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』こそは文学作品においてスポーツを道徳的訓練の手段として称揚したといわれるように新しい文学ジャンルを創り出したといわれている。本論は19世紀ジェントルマン概念を追究する試みとして、T.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』、C.キングズリーの諸作品を手掛かりとして若干の考察を試みるものであるが、それはまたこれまで追究してきたイギリス資本主義の発展に伴って変容したと思われるジェントルマン概念、言うなれば近代Sportman-shipの理念形成の問題を設定するための大雑な予備的試みであるとともにそれはまた19世紀イギリス文学にみられるスポーツを対象とする研究の構成をなすための大雑把な試みでもある。本研究は史料収集の不備も考慮して今回は特にT.ヒューズ、C.キングズリー自身の言葉で描写することに留意しながら論をすすめた。史料としては『Health and Education』(1878年)、『Alton Locke』(1983年)、『Westward Ho』(1969年)、『Letter and Memories of his life, 2 vols』(1877年)、『Tom Brown's Schooldays』(1898年)、『Tom Brown at Oxford』(1871年)を使用した。

I Muscular Christian

T.アーノルドはパブリック・スクールの教育改革に偉大な影響を与えたと評価されたり、⁷ 1850年から70年の階級秩序を強化する教育制度の先駆的思想を準備した人、なによりもT.アーノルドの影響が最も大きかったのは社会的目的の復興、キリスト教徒的ジェントルマンの教育にあったと言われている。⁸そしてこのT.アーノルドによって最も影響を受けたと言われるのがC.キングズリー、T.ヒューズであった。しかもT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』は文

学作品においてスポーツを道徳的訓練の手段として称揚した元祖であると言われ、¹⁰19世紀半ばに強調されてくる“Manliness”こそこのT. ヒューズに負うところが大きかったと指摘されているのである。¹¹さて、T.ヒューズは『Tom Brown's Schooldays』においてこう言うのである。

Shall I tell him to mind his work, and say he's sent to school to make himself a good scholar? Well, but he isn't sent to school for that — at any rate, not for that mainly. I don't care a straw for Greek particles, or the digamma; no more does his mother. What is he sent to school for? Well, partly because he wanted so to go. If he'll only turn out a brave, helpful, truth-telling Englishman, and a gentleman, and a Christian, that's all I want,¹²

嘘を言わないこと、勇敢であること、ジェントルマンとしての態度を身につけること、そしてキリスト教徒になってくれること、それはまさしく郷士ブラウンとして子供のトムに期待したものであり、かつ、ヴィクトリア中期になって中産階級が求めはじめていた理想像でもあった。トムはまさしくそのような人格形成を確立するためにラグビー校に入っていくのであるが、そうした態度はスポーツを通じて獲得されていくのである。また、1861年T.ヒューズは筋肉的キリスト教徒について次のように述べている。

where so far as I know, the least of the muscular Christian has hold of the old chivalrous and Christian belief, that a mans body is given him to be trained and brought into subjection then used for the protection of the weak the advancement of all righteous, and the subduing of the earth which God has given to the Children of men. He does not hold that mere strength or activity are in themselves worthy of any respect or worship, or that one man is a bit better than another because he can knock him down, or carry a bigger sack of

potatoes than he. For mere power, whether of body or intellect, he has (I hope and believe) no reverence whatever, though, cateris paribus, he would probably himself, as matter of taste, prefer the man who can life a hundredweight round his head with his little finger, to the man who can contrust a string of perfect Sorites, or expound the doctrine of “contradictory inconceivable.”¹³

少々長い引用文ではあるが要はこうである。T.ヒューズは“Mascularmen”という単なる筋骨たくましい人と、“Mascular Christian”筋肉的キリスト教徒とは区別されなければならないと指摘しているのである。そしてただ両者に共通するところと言えば、よく訓練された肉体を持つことぐらいである。つまり、T.ヒューズがいう筋肉的キリスト教徒とは中世の騎士的かつキリスト教的信念を持っているような人であると指摘するのである。さて、T.ヒューズの言う筋肉的キリスト教徒が既述したようなものであるならば、C.キングズリが言う筋肉的キリスト教徒とはどのようなものであったろうか。1865年、C.キングズリは『David』というテーマのもとで筋肉的キリスト教徒についてこう言及するのである。

Its first and better meaning may be simply a healthful and manful Christianity; one which does not exact the feminine virtues to the exclusion of the masculine.¹⁴

このように、C.キングズリは筋肉的キリスト教徒の概念について説明しながら、“musculine”については歴史的な説明を展開していくのである。中世において無防備であったキリスト教徒は迫害を受けてきたが、しかしそのような時代であったにもかかわらずgentleness, patience, resignation, self-sacrifice, self-devotionといった諸徳を身につけた。しかもこれらのすべては女性的徳であったが、これらの諸徳をより高尚な理念へと形成していったのが騎士道であったというのである。

The warriors of the Middle Ages hoped

that they might be able to serve God in the world—even in the battle-field; at least the world and the battle-field they would not relinquish, but make the best of them. And among them arose a new and a very fair ideal of manhood; that of “the gentle, very perfect knight,” ……¹⁵

A higher ideal, I say, was chivalry, with all its short comings. And for this reason; that it asserted the possibility of consecrating the whole manhood, and not merely a few faculties there of, to God; ¹⁶

このようにC.キングズリは筋肉的キリスト教徒を騎士道的資質に求めたのである。C.キングズリの諸作品の中でもとりわけクリミア戦争を意識して書かれたといわれる『Westward Ho』の主人公、Amyas leighもまた筋肉的キリスト教徒として描写されているのである。このようにC.キングズリの筋肉的キリスト教徒はイギリス帝国主義の精神的支柱ともなるべき要素を具えていたとも言えよう。Minchinは筋肉的キリスト教徒についてこう指摘する。「もしわれわれのいう筋肉的キリストが何をしたかと訪ねられるなら、われわれはイギリス帝国を示したい。わが帝国は断じて観念論者や論理学者のいう国家によって作りあげられたのではない。」¹⁷と。C.キングズリやT.アーノルドの騎士道的資質を具えた筋肉的キリスト教徒はその男らしさについてさらに言及していくのである。

II Christian GentlemanとManliness

R.gilmourが指摘するところによれば、イギリスの19世紀半ばのジェントルマン概念の変容過程において“Gentleness”と“Manliness”とは同等に強調されたという。¹⁸ 例えば、E.Gaskellの『North and South』、この作品における工場主ThorntonはS.スマイルズ的思想の持主であるが彼はGentleman 又はGentlemanlyよりもむしろManとかManlyという言葉で自分自身の人格を表現することを好む人物として描写されている。

さて、E.DunningとK.Sheafはイギリスの近代化の過程を次のように捉えている。

The dominant long-term process in nineteenth-century Britain was a process of embourgeoisement. By this, we mean that, as the nineteenth century progressed and industrialization gathered momentum, the power of the bourgeoisie grew with the result that institutions which had previously been adapted to the interests of the aristocracy and gentry began to reflect bourgeois interest and bourgeois values. The public schools were no exception.¹⁹

このように彼らは19世紀イギリス社会の近代化の過程をブルジュア化過程として捉えている。

さて、T.アーノルドによるクリスチャン・ジェントルマン像をもって変革されていく過程でのパブリック・スクールの教育理念もいわゆる《ヴィクトリア中期の妥協》という特長を内包するものであった。そして、結果的にはこの新しい理念こそはその後のイギリス社会の価値体系を準備していくのである。しかしながらT.ヒューズやC.キングズリが唱える“Manliness”の概念は、そのクリスチャン・ジェントルマンの価値観を表現するための重要な手段としてパブリック・スクールに『ゲーム崇拜』をもたらすようになってくるのである。そして、このような事態はパブリック・スクールが“Manliness”像といった中産階級的美徳を教え込む教育機関になっていくことを意味するものであったと思われる。そして何よりもパブリック・スクールの教育目的が強健で男らしい性格形成にあると教えたのはT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』であつたらう。

After all what would life be without fighting, I should like to know? From the cradle to the grave, fighting, rightly understood, is the business, the real highest, honestest business of every son of man. Every one who is worth his salt has his enemies.²⁰

T.ヒューズはそのための教育手段として次のように述べていく。

Don't let reformers of any sort think that they are going really to lay hold of the working boys and young men of En-

gland by any educational grapnel whatever, which has't some bona fide equivalent for the game of the old country "veast" in it; something to put in the place of the back-swording and wrestling and racing; something to try the muscles of men's bodies, and the endurance of their heart, to make them rejoice in their strength.²¹

このようにパブリック・スクールにおけるトムの成長過程そのものがパブリック・スクールにおける“Manliness”像の形成過程でもあったろう。

さて、1872年C.キングズリはチェスターでの講演で『Heroism』について言及し、こう言うのである。「ヒーローとは神のような男であろう。」と。²²T.アーノルドが騎士道的精神を害悪視したのに対して、C.キングズリのいうヒーローは時代の精神に捕らえられた拜金熱に浮かされて金持ちになることにあくせくする、²³このような時代的批判精神となるような騎士道理念の復活させるのである。

They ennobled the heart of Europe in the fifteenth century, at the re-discovery of Greek literature. So far from contradicting the Christian ideal, they harmonised with — that more tender and saintly ideal of heroism which had sprung up during the earlier Middle-Ages. They justified, and actually gave a new life to, the old noblenesses of chivalry, which had grown up in the later Middle Ages as a necessary supplement of active and manly virtue to the passive and feminine virtue of the cloister. They inspired, mingling with these two other elements, a literature, both in England, France and Italy, in which the three elements, the saintly, the chivalrous, and the Greek heroic, have become one and undistinguishable, because all three are human, and all three divine.²⁴

このようにC.キングズリは『Heroism』において、古代ギリシャの英雄に真の“Manliness”を見出すのである。そして何よりもC.キングズリが主

張する『Heroism』は自己犠牲と社会奉仕の精神を強調するのである。ルイ・カザミアンはC.キングズリのこのような主張に対して、人間同胞という古来の思想や社会奉仕という新精神というものが協同主義者達が固く信じている信仰であったと指摘している。²⁵

And it is of the essence of self-sacrifice, and therefore, of heroism, that it should be voluntary; a work of supererogation, at least toward society and man: an act to which the hero or heroine is not bound by duty, but which is above thought not against duty. Nay on the strength of that same elements of self-sacrifice.²⁶

C.キングズリやT.ヒューズにみられる自己犠牲の主張はT.アーノルドのクリスチャン・ジェントルマン像に内包されるものであった。彼らの主張する『Heroism』の資質的条件は中世騎士道の理念としての“Manliness”像を追求していくようになる。C.キングズリやT.ヒューズはそれをスポーツ活動に陶冶の場を身い出していくのである。

III Muscular Christianとスポーツ

M.Tozerによれば、19世紀イギリスにおいてクリスチャン・ジェントルマンは団体精神 (Esprit de Corps) を内に秘めた存在としてその価値が認められつつあった指摘する。²⁷そしてT.ヒューズの『Tom Brown's Schooldays』はまさに近代Sportmanshipとしての団体精神というカテゴリーの先駆的思想をなすものであったと言われている。²⁸それはヴィクトリア朝時代を代表する産業ブルジュアジーが求めた徳、つまり、「競争」、「集団」、「男らしさ」といったモラルと合致するものであったろうし、又、自己犠牲、社会奉仕といったモラルはイギリス帝国を支えるモラルと合致したと思われる。さて、T.ヒューズは『Tom Brown's Schooldays』においてこう語らせている。

What I have to say is about public school, those much abused and much belauded institutions peculiar to England.²⁹

このようにT.ヒューズはこの作品の目的がパブリック・スクールでの日常生活を描写することであった。つまり、『Tom Brown's Schooldays』がT.アーノルドについて書かれたものでなくつとめてそれがパブリック・スクールにおける生活(教育)のことであったことを強調しておきたい。さて、『Tom Brown's Schooldays』は当時パブリック・スクールにおいてスポーツが盛んに行なわれていたことを教示してくれる。そして特長的なのは、ボクシングを除いて、クリケットやフットボールといったような集団スポーツが好んで実践されていた。

Should you never have to use it in earnest, there's no exercise in the world so good for the temper and for the muscles of the back and legs.³⁰

さて、パブリック・スクールにおけるスポーツはいまやスポーツ以上の何かに変わろうとしていた。それは身体的健康維持の目的からスポーツの価値がチーム精神を通して性格形成の手段へと転化を見せはじめていた。

I want to be A 1 at criquet and football and all the other game, and to make my hands keep my head against any fellow, lout or gentleman.³¹

このように考えていたトムもやがてスポーツがそれ以上の価値を持つことに注目してくるのである。

"I'm begining to understand the game scientifically What a noble game it is too ! "Isn't it ? But it's more than a game .It's an institution" said Tom.

"yes," said Arthur,"the birthright of British boys old and young, as habeas corpus and trial by jury are of British men." "The discipline and reliance on one another which it teaches is so valuable, I think,"went on the masters, "it ought to be such an unselfish game. It merges the individual in the eleven; he does't play that he may win, but that his side may." "That very true." said Tom, "and that's why football and criquet , now one comes to think of it, are such

much better games than fives or hare-and-hound, or any others where the object is to come in first or to win for oneself, and not that one's side may win."

And then the Captain of the eleven ! said the master, "what a post is his in our School -world ! almost as hard as the Docter's; requiring skill and gentleness and firmness, and I know not what other rare qualities." Which don't he may wish he may get ! " said laughing;³²

このようにして、スポーツはトムをして筋肉的キリスト教徒としての性格形成には欠かせないものとして確立されていくのである。しかも、こうしたスポーツ崇拜は新しいパブリック・スクールにおいてはチーム精神が忠誠心や愛国心へと変容していったと言われている。いまやパブリック・スクールの生徒でスポーツに無関心な生徒は問題外であった。こうしたパブリック・スクールの状況下においてトムは尊敬する上級性のブルックの影響もあってスポーツに励むようになっていくのである。そして、パブリック・スクールの生徒達のこうした信念はスポーツを益々愛国心、道徳的訓練、義務感へと連結させていくのである。それはまさしくパブリック・スクールの変革期にあって、ジェントルマン像に社会的義務が伴ってくる、というような新しい理念と合致するものであったろう。以下、少々長い引用にはなるが、スポーツが19世紀のイギリス社会にどのように関与していったのか、トムに語らせてみる。

My dear sir, a battle would look much the same to you, expect that the boys would be men, and the balls iron; but a battle would be worth your looking at for all that, and so is a football match.³³

It's because we've more reliance on one another, more of a house feeling, more fellowship than the School can have. Each of us knows and can depend on his next-hand man better—that's why we beat 'em to-day. We've union, they've divis-

ion —there's the secret —(cheers). But how's this to be kept up? How's it to be improved? that's the question. For I take it we're all in earnest about beating the School, whatever else we care about. I know I'd sooner win two School-house matches running than get the Balliol scholarship any day—(frantic cheers)³⁵

さて、ルイ・カザミアンはC.キングズリをして彼の重要な関心事が魂の衛生と肉体の衛生にあったことを指摘している。³⁶ 事実、C.キングズリがスポーツに対して描写している個所が彼の諸作品のなかに散在するのである。ここではC.キングズリが描く筋肉的キリスト教徒がスポーツに対してどのように考えていたのかを彼の作品のなかから描写してみる。

I confess, in spite of all my class prejudices against game-preserving aristocrats; I almost envied the man; at least I seemed to understand a little of the universally attractive charms which those same outwardly contemptible fresh running brooks: the exercise, the simple freedom, the excitement just sufficient to keep alive expectation and banish thought,³⁷

C.キングズリのいう筋肉的キリスト教徒が伝統的スポーツに対して理解を示す反面、実際は19世紀、半ばのイギリスの田園生活は期待を裏切るような状況であった。又Altonの住む都市生活も市民にとってはスポーツを楽しむような状況ではなかった。C.キングズリにとって、このような19世紀半ばのイギリスの状況に対して肉体の復権を求めるのである。そしてそれはC.キングズリの場合、帝国主義的精神と合致した思想としてイギリス社会に受け入れられていったと思われる。そして、筋肉的キリスト教徒がスポーツに期待していたところを示せばこうである。

It was a noble sport—a sight such as could only be seen in England —some hundred of young men, who might, if they had chosen been lounging effeminately ab-

out the streets, subjecting themselves voluntarily to that intense exertion, for the mere pleasure of toil. The true English stuff came out there; I felt that, in spite of all my prejudices—the stuff which has held Gibraltar and conquered at Waterloo—which has created a Birmingham and a Manchester, and colonised every quarter of the globe—that grim, earnest, stubborn energy, which, since the days of old Roman, the English possess alone of all the nations of the earth. I was as proud of the gallant young fellows, as if they had been my brothers —of their courage and endurance (for one could see that it was no child's-play, from the pale faces, and panting lips), their strength and activity, so fierce and yet so cultivated, smooth, harmonious as oar kept time with oar, and every back rose and fell in concert—and felt my soul stirred up to a sort of sweet madness, not merely by the shouts and cheers of the mob around me, but by the loud, fierce pulse of the rowlocks, the swift whispering rush of the long, snakelike eight oars, the swirl and grugle of the water in their wake, the grim, breathless silence of the straining rowers. My blood boiled over, and fierce tears swelled into my eyes; for I, too, was a man, and an Englishman;³⁸

『Yeast』の主人公、Lancelotは乗馬を好むスポーツマン、つまり、ジェントルマンである。そのLancelotにとってスポーツは階級を越えて実践されるべきであると言わせしめた。又『Alton Locke』のAltonはチャーチストでありながらもスポーツに対しては階級を越えて同胞愛的、民族愛的意識を示しながらも共感を覚えていくのである。この両者のスポーツに対する態度は、ルイ・カザミアンが指摘するように、C.キングズリにとっても、否キリスト教社会主義者達にとっても革命を越える傾向はなかったし

、貴族的政治を評価し、王政復古を念願としていたことから³⁹それはむしろ19世紀イギリス社会が期待していた人物像を提供したと思われるし、筋肉のキリスト教徒という宗教もそのような状況と合致するものであったらうと思われる。C.キングズリの筋肉のキリスト教徒は自己犠牲、社会奉仕の精神の資質を陶冶する場をスポーツ(チーム・スポーツ)に求めていく。

Moreover, they know well that game conduce, not merely to physical, but to moral health; that in the playing-field boys acquire virtues which no books can give them; not merely daring and endurance, but, better still, temper, self-restraint, fairness, honour, unenvious approbation of another's success, and all that "give and take" of life which stand a man in such good stead when he goes forth into the world, and without, which, indeed, his success is always maintained and partial.⁴⁰

暫定的結語

19世紀のジェントルマンの概念についてC.キングズリ、T.ヒューズの諸作品を中心としてその大雑把な追究を試みてきた。近代Sportmanshipの概念を思想的に把握しようと試みる時、C.キングズリやT.ヒューズが指摘する筋肉のキリスト教徒の概念もまた通りすぎせない位置を占めていると思われるのである。ましてイギリス近代スポーツを思想的に把握しようと試みる時、それを伝統的ジェントルマンの価値体系と中産階級(S.スマイルズの)ジェントルマンの価値体系との融合的発展過程としてとらえるならば、なおさらであろうと思われる。C.キングズリやT.ヒューズが描写する筋肉のキリスト教徒は騎士道の資質をもとにやがてはイギリス帝国主義の精神を支えるようになるジェントルマン像であったと思われる。

引用・参考文献

- 1 "Taines Notes on England", trans by E. Hyans, p.111. New York. 1957.
- 2 E.C.Mack, "Public School and British Opinion since 1860," p.123.Greenwood Press.1971.
- 3 前掲書. p.114.
- 4 H.Spencer, "Education, intellectual, moral, and physical," p.177.Watts & Co, 1949.
- 5 石田憲次、白田昭英訳『イギリスの社会小説、1830—1850』p.351. 研究社. 昭和35年.
- 6 柴田元幸、菅原克也訳『オリンピックと近代』p.164. 平凡社. 1988.
- 7 阿部生雄『筋肉のキリスト教徒と近代スポーツマンシップの理念形成』p.177. 岸野雄三退官記念論文集.
- 8 T.W.Bamford "Thomas Arnold on Education" p.30.Cambridge Univ.Press. 1970
- 9 松浦嶺考『近代イギリス史の再検討』p.35. ミネルヴァ書房. 昭和37年.
- 10 若松繁信、妹尾剛光、長谷川光昭訳『長い革命』p.125. ミネルヴァ書房.1983
- 11 前掲書. p.145.
- 12 T.Hughes, "Tom Brown's Schooldays" p. 60. Macmillan and Co. 1898.
- 13 T.Hughes, "Tom Brown Oxford" vol.1. p .170. Boston,1871.
- 14 "Charles Kingsley's his Letter and Memories of his Life", vol.2. p.212. Henry, S King & Co. 1877.
- 15 前掲書. p.213.
- 16 前掲書. p.213.
- 17 加藤橘夫『近代イギリス体育史』p.59. ベースボールマガジン社. 昭和54年
- 18 R.Gilmor, "The Idea of the Gentleman in Victorian Novel" p.18.London.1981.
- 19 E.Dunning & K.Sheard, "Barbarians, Gentleman and Players", p.67~68. Martin Robertson.1979.
- 20 前掲書. p.231.
- 21 前掲書. p. 33.
- 22 C.Kingsley, "Health and Education", p. 205.Oxford. 1983.
- 23 C.Kingsley, "Alton Locke", p.101. Oxford. 1983.

- 24 前掲書. p.207.
- 25 前掲書. p.373.
- 26 前掲書. p.210.
- 27 M.Tozer, "From Muscular Christianity to 'Esprite de Corps" p.126~128. Station.VII.1. 1981.
- 28 前掲書. p.338.
- 29 前掲書. p. 50.
- 30 前掲書. p.246.
- 31 前掲書. p.255.
- 32 前掲書. p.289~290.
- 33 前掲書. p. 85.
- 34 前掲書. p.100.
- 35 前掲書. p.119.
- 36 前掲書. p.132.
- 37 前掲書. p.328.
- 38 前掲書. p. 86.
- 39 前掲書. p.105.
- 40 前掲書. p. 87.

(受理 平成2年3月20日)